

事は人々へ故人の如く幾へもまじり動を流るる
 たる也と云ふも亦悲しうも存身更なる所は
 母の如くも云ふ事ハ存せ給ふ事何女ハ
 たましくも云ふものも水もまじり居る性成
 ぬるとあるがごとくはひたぐ別々にも成り
 薬にたぐふも諸口をめぐりたぐはうも
 ぬく燈の如くと思ふたぐもまじり事也と
 云ふと笑ふ又云ふも面をくもも同くあひ
 たり大敷ひつる事之始心もそけ更か又能く
 え果た女はまじり能害候も能く能中も此も
 中へ如くも者もまじりも何のまじりも
 ぬ成り居る所のまじりもまじりも能く

油算

たまじり中へ唯今世をわくも思ふてい
 其時を流るる心地もなへ余程いとせし
 何のやうのまじり事にも生れ遺り居る
 具り也たりまじり更切り居るも其の
 形も一也あまも格の居遠めく候も
 とももまじり居る也平が友同有行某の
 或方の奥方には病もとの言も居る事
 候もまじり候も好まも事もやわゆる
 候もまじり候も好まも事もやわゆる
 其後り候もまじり候も好まも事も
 もまじり候も好まも事もやわゆる

大蛇の事

如りともく返く年暮と遷延し〜〜見らるに吾もさるハ
 天明の中ひの事とて方えり是と分る時ハ深山見え
 修く事と見えり石段事又予が知巴川澄行素
 のお宿に回人雅と時親類の方へ来り〜髪鬚眉も
 秀く白髪ゆる老氣の有り〜と又の尔さるうえあの
 者之轉蛇と音と〜故あのため〜白髪〜成り能く見
 色〜〜と云〜故知心〜能く見〜色〜今〜性
 覚〜ありと相ひ者ハ義濃國加茂於虎澤者の者らるが
 尾別名古屋〜十重深良の方あり
 十歳程〜成孫と轉蛇と音と〜るゆゑにまも俱〜吾れ
 其轉蛇の腹と切裂せ〜孫乃藝を乳〜と云〜ま
 中〜覚束ぬ〜事〜毛と吹〜底と露〜流の〜



一捕画



ねん〜人〜面き〜も〜内〜外〜る〜報〜教〜と〜
 由〜使〜う〜奉〜と〜老〜人〜の〜事〜恒〜令〜更〜切〜り〜漫〜う〜り〜と〜
 あ〜う〜ぬ〜余〜之〜あ〜の〜轉〜地〜と〜り〜の〜ま〜先〜並〜バ〜又〜人〜の〜五〜供〜
 と〜と〜元〜と〜ま〜捨〜並〜と〜〜と〜ま〜名〜百〜屋〜(出〜)〜難〜作〜
 甘〜想〜身〜跡〜と〜も〜難〜の〜所〜に〜華〜ま〜〜包〜む〜と〜の〜と
 格〜せ〜目〜の〜取〜ら〜え〜目〜鏡〜と〜入〜せ〜又〜回〜而〜版〜治〜屋〜丁〜の〜信
 高〜と〜云〜口〜版〜治〜り〜内〜外〜並〜及〜山〜〜左〜右〜(南〜預〜る〜)〜標〜と
 未〜又〜り〜お〜ま〜さ〜せ〜十〜分〜よ〜支〜夜〜と〜の〜〜か〜乃〜轉〜地〜の〜い
 修〜る〜取〜(黄〜日〜と〜)〜初〜〜侍〜更〜居〜る〜ま〜肉〜に〜轉〜地〜出〜来〜り〜馬〜
 修〜り〜香〜ま〜〜後〜難〜う〜腹〜と〜切〜割〜と〜〜近〜海〜り〜轉〜地〜の
 大〜勢〜と〜僅〜〜と〜取〜(連〜行〜考〜)〜り〜決〜地〜と〜あ〜く〜教〜せ
 一〜聖〜物〜の〜音〜〜時〜版〜(篤〜)〜落〜月〜〜後〜切〜破〜り〜無〜ま〜バ

蛇文如連錢錦也
 今當其地ハ多クあり考つる時ハ會々蛇之形も
 記々蛇を多藏編よ麻喰蛇も多々漢古々々蛇
 蛇ハ麻と香と云々書り見えたり前ノ麻生う々
 産と追新くる大地もこの蛇也又ハ勝地りや計り
 かく山海經り巴蛇吞象と云々又正字也巴蛇
 長十尋備青黃赤白黒色今蛇其類と云々ハ巴蛇も
 蛇也も多々乃う似るもの又北魯預言曰有一蛇
 横斜谷嶺路高七八尺莫知其首尾四面小蛇翼之無數每
 一抱身即林木摧折殆自半方過盡阻行旅云々是也
 小蛇と云々吾角と云々のなり前々志津地村乃大地也
 西りつる以て林木裂靡采爲折創云々是也

類々のやちうりウハバミの事を記しつゝ書ハ多ク傍に
 土種類と季後書記したるものう跡り多ク又飛海加
 着後々外西國九別よも野樵と云ふものも種地
 種うく甚短く世の人多クハ是と見んウハバミなりと
 中觸も有奉と云ふものも是と見ハ餘種うて
 地地よりハ入希なるもの見えたり又巴地ハ野樵の
 奉ことと云ふも巴地ハ野樵も中々遠く奉と見
 南給が西遊記又ハ新著書集うづも二種なき種地
 地よりものも是巴地の類うと思はるる國を所より
 種くハ地地も奉と云ふも遠く種も奉と奉能を
 ざる事なり

追加

いふやうな小蛇の如く頭大きく首筋の細きものな蛇を
 馬に三重のこも三重のももまき中へと曲り込り余り蛇の
 善行のよのよと思ひまじど蛇も顔も極悪なりたはる
 大蛇ハ拙まが如く大慈の慈の似たりなりと後のかま
 振るまき人馬ととり食入悪顔大の子の如くりり
 うとくハゆく忍愛のぬりのまじも類ひのまじ強悪の
 猛獸とく咬るふ脚蛇も如竹成性りや色は復ものま
 幸よ何れも深心のこも通見交る者も迹来りて其性
 の善悪と蛇と毎へるものまじと疎り雨日まじハ
 先ハ蛇さるう一琉蛇より汲りたる蛇皮縁と云このま
 は善悪と張あるは今ハ脚蛇の皮と九年と重縁
 大蛇の種蛇を潰くはるものと志まきこりこりに寄せる



明地も大小少く濃淡を元来大地乃多之真黒の多く
 又赤多白色おもろく様々なり然地乃幸八十の巻

少と要要記 重々外ありに記 置りり

予 天保九年戊の七月廿九日中山道本山宿にありり

は渡り座 此は白大溪のまろ右宿より南のま

山一ツのまろ 餘國の山より八海へ僕がま織り二里やもありしなり

産と焼く 大生を伐出に 此色ハ樹木澤山山多産又焼くも切は

二十丈も二十丈もより 吾産へ落 重くは市日右の

本と取り移るるに 此地居く大は警り後々移り

篤く見るよ 此地願碑けく 自色く死居りりとは是を

先々伐落と 此本乃本に真垂り 衆上へ落るるなり願と

歩碑く色るるもの 知るるなり 此地乃幸二尺守

早うやぐもまきりて云ふ故色ハ如行松もどく
あつぎまハ程見く来り一者ハあきうと能吟味せしに
暇自戻と附出たる者ハ一故今日南着より懸りた
糸り一にた松の地ハまきり枕心跡り一業りたるもの
と一又山一ツ向ハ二里半りもまきり捨りたるの来り
は見えぬまきりやまきりと書くあり兼り物世とめて
山極とるものも一皮もは地と見えたる者ハけさげも
落知来るどハ喰ひも敷うもみり竹の性物乃居るも
知り居申う一松成事たるもは夜は富り見え
来り一ものたるまきり専方も好くまきり松朝夜
た一より其落是乃日ふ右着の履ハ来りたる人とは乃
中やを今日ハ南着より大勢と僅一ハハ大地とまきりに

大地

三ノ三十八

あつとや事ハ少少松の跡り来きハ見物とくまきり
常と波一居りてまきり業りたる此業の死と書せも
松成事たるも亦ハまきり一田向院うり日今松のあき
松林各列ハ大地の通りたる跡を業本赤く松のもの
まきり前ハまきり津野村の之跡もまきりたる跡を業本松の故
通り道能くあり事と書くまきりも古武の性一故更難く
思ひ居るには事と平ガ知巴縣道言り出り一同一
彼まきりたる跡をぬも業本松ハ松林業本とる
と一居徳山の奥ハ二三里も好りたるには所をオヂイの事り
たハ跡りたるまきりも松林と書く一存居りハは色
あきハうまきりことハまきり方まきりオヂイくと云申其書
神代よりも弁りまきりたるものハ大木の相考ハ受け九た。

とのりきりせうあんありに小庵せうあんをば庵主あんしゆと云い九別くわうべつの者ものうらぐとめハ
 強悪かうあくめく天罰てんばつとあり教かう心しんくく十六じゅうろく部ぶく妻つま道心だうしん
 心こころ堅固けんこと成なり世よへ来きりく住すま居い成なり居いるるううまま教かう心しんの
 澤さわくく八はつ村むら中ちゆうく金子きんぎ僅わずか拾しつ五ごと酒しゆ前ぜん匠じやうの活くわく乃のく死し亦また
 及およびくまま金かねり概がい念ねんと残のこくく死しは兼かね友ゆうの金かねとと心しんにに持も
 持もつつるるままめめく降か終しゆうと云い相あ死しく後のちも右みぎ金かねと教かうささるる教かう
 止と事じと心しんもも修しゆり埋まい葬じやうくくううは事じと彼かの強かう悪あくの
 刺さ居いく教かう法ぽう竊せつり三さん味みハ初はつく暮くれと極ごく懐わいと金かねと死しを
 ももども教かうささるる候まう是こゝもカかは但ただと指さしと二にかかつつここを
 用いふふにに教かうささるると教かうくく二にの腕うでり握にぎり付つくく
 也や行いくくも教かうささるる候まう主しゆ場ぢやうハむむりに死し人にんの振ふと捨すて
 く海うみののままももまま子こ親おやとささるるののままくく極ごくくくをを握にぎり

金瓶念

三八四十一



英泉画

付とるる前より腕臂り出〜〜之を極依り〜
 爲〜〜
 其事〜天爵の道〜
 己の眼も又生れ〜
 六十餘〜
 消滅〜
 怨〜
 人の活〜
 道心〜
 故餘人〜

金瓶念

者〜
 合〜
 事〜
 又〜
 親心〜
 及王位臨命終時無隨者〜
 漏〜
 小〜
 送〜
 乃寶〜
 人の道〜

毒のこころに根をもちきつた毒とてとらに毒探とていふが是ハ
 至新成事なり外に事ゆゑと毒と捕え免も南も河れ
 毒探ハ交々〜あまもる交々〜成程毒流〜いふ〜ぬ
 事なりしを止せ〜と〜言ふれハ毒探ハ免と成〜と
 道も方々〜激り根たや〜と成り心後ハ思ふ〜やま
 〜〜と見入〜り時〜為事味も〜〜成〜も入
 情〜と〜と云ふ〜食事せ〜に件ハ坊主遊〜り云
 至き〜削〜よ〜店〜折込〜と〜食店〜餘も
 河もバ是と〜べりさぬ〜〜坊主〜與るよむま〜よ
 強〜り飯も餘〜の澤ぬ〜河もバ是も強〜りさぬ〜又
 與る〜に飯〜と〜さ〜り〜月〜に〜ハけの跡りも
 河り〜け〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜



中野我五

は飯甚ぞ強みき松子好きであぢも之珍りく去り
 たり臨みく人々親と目合々き松河はハハハ成僧りや
 世山奥ハ出家の来るべきあり也も其を審り目以家
 が悪可業とさきと云の辨の来りく止めありのうと
 弘法大伴採の来りありて滅めありのや何ん其ハハハ
 毒採ハ止よまらるぐらうとぞも何ぞ又強奪成者ハ
 突入ぞ〜〜松は深山へ日〜入也居るものぞの辨や
 天物がこいらく山極ハ止らう〜心控〜そのハ危もら
 つまや我々中り毒採も〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
 二三人〜〜逆〜〜毒採と〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
 多き中よイハナその文け六尺浴の大突とけり〜
 依び〜〜この坊主の美見り法が〜は突ハけらまほ

イハナ

三ノ四十五

ちが〜〜に云罵り〜や〜村ハ持降り若き者も大勝
 あり〜〜彼大突と料理後を割るに〜ハ何に金坊
 り〜〜〜の富子と初め飯ら〜も〜修り〜は時よありそ
 か〜強奪めり者並も〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
 ざり〜〜〜昔よりイハナ坊主り化るとの事也
 村也〜〜も古伝傳り事あり〜〜〜〜〜〜
 化身〜〜〜〜是ハ予が初已中川竹某先年被む〜
 之愛物役り〜居〜住り安来り世あり信州津獄の
 前後ゆ〜〜大突よび〜〜〜〜〜〜〜
 たり〜〜〜は色竹也〜〜も古伝あり〜〜坊主り成
 と云来り事〜〜文政三年庚乃其本曾路後乃の阿
 イハナ乃坊主り成〜事也〜〜〜〜〜〜〜

赤原野敷原色にありて人々の肉にイハナイハナの坊主坊主と
 ありと云出しと知り居る者あるは是ハ水と所蔵山
 のり物と東のりと流き出る竹と云川の瀬と養流
 ありありイハナと二尾まぐり一尾ハ足餘り一
 尾ハ少くあり又足程ありの事腹中より電子あり
 その電子をその日山中より坊主より奪へる覺のあふ
 電子の色は皆く甚く恐るゝとの物なればなり
 ありあり一不遠の故その奥に坊主ありと云ふ
 前の子村の物今一回一松成事ありと云ふ
 所蔵山の麓後まきまきと東の遠の故その場を
 三四十里程隔てまきまき列の事一狐ハ女と成程を
 入道と成程侯ハ老婆と成の類ありイハナと坊主と

イハナ

三十四十六

化る者ものと見えたり
振りて重く要し
記し候りなり

濃別武儀郡の板野川にイハナ澤あり
坊主に化る物ありと云ふ者あり
坊主と云ふ者あり

イハナイハナと甲別信別イハナあり山川イハナより生る魚イハナ之ヤマメイハナとの
 魚の類あり棘イハナり似る魚之ヤマメハ類文をイハナ
 類文なりと云本草綱目啓蒙乃嘉美の条よりイハナ
 津輕一名山竊魚通雅溪ノ深淵中ニ産シ巖穴ニ居ル
 故ニイハナト名ク形チ鱗魚ニ似テ小ク白色ニメヤ
 マベノ如クナル斑紋ナシト云々又ヤマベハ津輕ノ
 方言ニメ京師ニテハアマゴト云一名ミヅグモアメ
 ゴ伊州イモコ若州ヒラツコ和州白ヤマガハ丹後ヤ
 マコ同上大和本草雲州ノ形チ香臭ノ如ク
 長サ七八寸身ニ黒斑及細朱点アリ鱗細ナリ奥

洲和洲及他洲ニ産スル者ハ黒斑ノミニメ朱點ナシ
 是廣東新語ノ似嘉興ナリト云々ヤマベトイハナトハ
 ボラトアカメ乃ド同ト根成るのみ々々令別種
 たりヤマメハ滝乃トに居イハナを離乃下又信乃の地
 濃別ノ武儀形ノ板九門ゆ々ハ之尺以之のヤマメノ事
 と鼻マガリト云岩門ゆ々云々々々々々々々々々々々々々
 とぞ又同ノ地味も同國形と邪乃形と門ノ事々々々々
 アマゴト云々味甚と宜と云々尺以之の大形分と
 アマスと云々風味鶏乃魚乃事々々々々々々々々々々々
 諸國とも方言ハ種々形分故なり兼るなり
 又老煙茶活又田長又長十六年辛七月蒲生花彈守秀乃
 只見ハ毒流ト云々多入り柿濃夢山椒乃皮家々の

イハナ

三ノ四十七

氏家ノ河々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
 夕暮に暮り宿と云々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
 活り出ノ有徳水徳り及まぐ命と惜まぐるものなり
 養り南大守明白は門へ毒流ト云々々々々々々々々々々々々々
 益也や果々々々業教と云々々々々々々々々々々々々々々々々々
 とめ世へ々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
 事々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
 明日の事々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
 事々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
 所傳め々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

美津明色も面身好りと

所濱所殿色と水之ゆきざり」と

小日向色と茶碗色より一香り清り中と茶碗色より
大きなるも数十より清り茶根度換りたりと

小石川水川と色より白濁色と春種の電多清掃の枝
あどは寸種の分とお折と色よりを尾ハ大は換り細の

南類を悉くお清せしと
上野根岩大塚色ハ園子或ハゆき種より清り板橋色ハ

茶碗種もゆりゆり白は皆換りたりと
大塚の波切所の波切は白の電は白石と更くゆきと常の火

お石のゆきは火の大お操ゆきお見るよ火お石の
更にあがる事ありと我勿論初めの種をみる人も水の

電

三十五十

ちいぬの思の居るが夜彼の石をとくくゆきをとくく

取りゆきを捨りひるハまとま事なり

年代記り後堀川院寛喜二年奥洲石降如雨

續日本紀小光仁帝寶龜七年九月是月每夜瓦石及

塊自落内豎曹司及京中徃々屋上明而視之其物見

在經二十餘日乃止

五雜俎小萬曆壬子十二月廿五日申時四川順慶府安

州無風無雲雷忽震動墜石六塊其一重八斤一重十

五斤一重十七斤小者重一斤或十餘兩と見えたり

是亦同日乃墜りりまと石の降る事ハ春秋とまあ

歴史ホも色性もとも見える

果鴨也ハ多ク強水を或人皇子ハ行運水とさけ

植木屋竹某方へ三葉つるにまゝとて中もあつた落し梅け
きり余り珍愛甚しく舞南苑の中へ入り来り一時も花
さく油毫の後に花と鳴く見えれば解跡り末葉既
やぐらうりといふもあはれとあはれとあはれとあはれと
あつた落つる所所々にまゝ
大塚所殿富の墓古の側並つる鶴雄の方電よおとく
死せし由

子駄木山宮の道へお氏の庭は花大盛が落つるに
見る中よ黒さのりり石もあつた後々々々々々
より並つり解るにほひう見えれば大黒の形と鑄自
たか古鏡之石の類をたもまぐまぐと後に出つるハ
奇と々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

想山云は乃水は来り云並り中禪寺又ハ橋
湖ありり膳蛇の巻とある事を見えり既りこの
水中にまゝる後々々々々々々々々々々々々々々々々
居る後々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
く々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々
賽後と水中へ投つるものもあつたとてまじと彼騰
地乃巻とありて落せしものと見えりたもまじハ
不審とまじに及びまじと珍愛事と

かしの事う々々板橋の先戸田川色はるう々々落る
たるまじと電はるまじと
福山彦中ハ丸山の面裏内伊波良安危落る電ハ二百
廿五とつり々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

世朝り即り痛も甚敷右良安藤治と云又下男を人

御にありと是たむと云も云と

約迄局上花もくハ三人を願と云くは怪おせし由

三河清の養人も願とお色大ひようやと云るもの云と

淡草新巻執色も美向少成狂り中うき巻のちと

船からも云と云り

上野市幸坊の四度(海)るハき母捨余と云る他是を

目下小林氏のお侍も怪成事と

飛井戸色も園子狂の分ゆりて更り成東の云

大さく成行徳もよ即りてハ大荒と云人衣損と云

風巻来りて巻人巻揚通と云落更りて種と云

紋しきと云色ども是の云の云と云活も云と云



加茂源三郎

悪くもとらえり後竹枝せよも是も狂成事と
 は日下思乃池より龍巻かよりと専ら云物とて竹の世
 水と面より黒雲と成り怒り一更も松子ハ多きざりし
 う仲町色ハ一輪射泥橋の敷多々ゆら湯島乃切也ハ
 大さ大余乃程と流るるも狂成事なり
 は日下神小日向小石川色より深井東野中色も皆ハ
 まるく黒雲と成物とてわりとこなり
 浅草堂茶室乃者乃云よと三軒町田原町の三の雷敷
 の裏仲町家のうへへ吳歌店より雷敷乃とて市屋の
 三幸もく江島乃一腰袴もく死店よりと云又江の橋
 ぬく身ハ龍乃とてさきものも云今一人その色乃もの世ハ
 私を貝中さびは江も思量乃貝あると云よ兔の子乃

東へ毛も生ざらぬやうのやうな前足のもも三本あるに
けりまじりたる區の色も死傷の異狀落居るやうな
お違ふ身事と申す去うは種を難況多故お違ひ
や種も想辨なきもあはれに皆まじりに成成世のま
撰りて記し置りぬ人々も河も河も會款し
まもちりゆる色バ香を河を馬ハ路も大ハねの
おやも多かり辰よ物店も前月馬一疋を
らるひる有る結めさう圍りたりとたもさう
に

相鉢の況冬も申す或の記り先年老人の況は
浴水も多かり申禪寺の湖水の味とのたつ春の騰来
りぬぬもさうりまき山壽美成の記り電ハ

電

三五十四

震の云ひぬるものさの春もまは見えたり
天皇三十六年如李季自春至四月壬午朔辛卯電零大如桃子士辰電零大
四十雨永此後の奇とさるにさう種もは
大城のもに復み侍りてハの事もさう種もは
後よきけをさ始ハ日光山のさうり雲起り向ひう
筋後東南とさ電とぬも事もさう種もは
駒込の西教寺の駒山が春而ハりてさう種もは
さかい重さうぬ計りさう梅乃花牡丹の花のさ
是と他人の云傳るさうさうぬ唐去元の世に電の
其状ハ電のさう見のぬ柳子のさう電のさう河り
とや

元史不行志の云至元四年四月癸巳清州八單塘雨電

大過於拳其形有如龜者有如小兒者有如獅象者
有如環玦者或楮如卵或圓如彈玲瓏有竅白而堅
云々

按るに漢籍に載る所の記多々ある理り又物状を
手傳るる所ありありなるも其たよ河も其
斯揚の水と合々電とは出とていふもハ辨と
待ど乞率兒童とてどもとや其まはたるとと
あま雲霧の冷涼り為りて寒く冷りたるも
電ハ今ハ池中の水とあまるとに騰蛇の状を中り
あま〜〜電も亦のあま〜〜を面の〜〜はけりて其の
物も亦随あり〜〜電の〜〜も昔〜〜関々のハ上野は橋
山乃麓より傳る農家〜〜ハ夏月電乃ゆき事を春來

電

三ノ五十五

早〜知り〜田畑〜〜心〜〜とまるとまると椽名山ハ
清江流〜〜ハ成湖氷河其湖氷乃冬氷〜〜春り
即り中心より解か〜〜ハ電も〜〜宥り解か〜〜ハ
電も〜〜あま〜〜中心より解か〜〜ハ
宥り解か〜〜とまると中心より解か〜〜ハ
夏月〜〜とまると水〜〜ハ騰蛇乃まきて
ゆ〜〜とまると日光山の湖水も同〜〜とまると
電ハ中禪寺の湖の水〜〜とまると
虚空より〜〜とまると麓の里人常に經驗する所あり云
謝在抗云電似是霰之大者但雨霰寒而雨電不寒霰難晴
而電易晴如驟雨然北方常遇之相傳龍過則電下四時皆
有余在齊魯四五月間屢見之不必冬也〜〜ハ其の言

と云々

和訓栞曰新撰字鏡和名抄り電ヒカリとあり逆敷の條とて
名はくふへくしり霞ともあり電ハ吾邦の造字なり
美葉集に九雷と義別せり今乃俗名とヒヨウとの云
氷雨ヒヤメの事ありべし陸氏ガ説り電ハ冰雨也と云あり
駒山潮音雨電紀事云文政十三年歲次庚寅閏三月
念九午後晴天忽然晦冥迅雷兩三聲降電半時餘破瓦穿
屋株草多敗都下駒籠根津上野淺草之地尤甚矣其電小
者如梅子栗實大者如拳如朮每塊有文如重瓣梅花或似
牡丹花皆於中心有一堅實如水精白圭外邊絶類花瓣東
叡山中所降大者共三十一錢或至五十錢駒籠西教寺裏
所降大者六錢二分或六錢橫量二寸三分或三寸皆有花文

電

三ノ五十六

乃スナチコレ是千歲之一奇事也カキ曾門稗雅曰ハニ形全似玉珠其粒皆三
出此唯合小者形不同今所見大而有花文者乃録見聞以
傳後世云





又勝田氏乃大雨雹行乃待甚且具となり安まにな
託と号くも迎奉安及バざる降氷あり

大雨雹行

勝田獻

雹

三ノ五十七

庚寅閏月春盡日節入清和陽景驕向晚天氣忽變更寒威
刺々生迅颯雷公怒擊散硬雨明珠圓轉迸且跳湏更怪雲
蔽四野林谷振動泣山魍木丸小丸破屋瓦千矢萬矢下九
霄鳥雀飛回無處避女兒錯愕互叫囂忽疑馮夷發憤怒手
握神槌碎瓊瑤更怪女媧補天處誤觸列宿墜斗杓別有花
紋麗可愛三出五出巧於描君不聞昔時雨雹如人頭耳目
鼻口婉含嬌天工奇絕不可測甚勝人間費刻彫安知天公
好伎戲別發秘藏慰無聊人道此物非吉兆陰氣肅致傷稼
苗誰知太平無事朝縱有災異忽冰消只今四海無一事此
物何足為氛妖雖然祥異天所戒只恐嘉穀不豐饒默禱皇
天后土會和氣五風十雨玉燭調

又天保七年四月三日伯耆の國大山より一粟の黒雲起り

来りて但馬の國大庭谷と云一谷山間の狭き所也 電ひらり
 たり去ひりて童さ半如余小なるハ山間 電ひらり
 惟我も少るるも野個の中を電ひらりての事之是ハ
 其時其地仍合店 竹床より安より然も人み 惟我
 ち〜〜〜中の 電ひらりてハ竹と回りハ 時の 電ひらり
 尺滝流きり故多くの 雜雑 中の 電ひらりも多なり〜〜
 又伯耆の大山より八因幡一國を隔く てるは
 其條里も之も道無りハ少しも電ひらりぬ〜〜
 此布へ 来りて新作なり 降り降り きたハ一奇事なり 之より

想山著用奇集卷之三 終